

専門研修プログラム名	琉球大学病院連携施設精神科	専門研修プログラム
基幹施設名	琉球大学病院	
プログラム統括責任者	高江洲 義和	

専門研修プログラムの概要	<p>基幹病院の琉球大学病院は、沖縄県内の児童思春期例や摂食障害の入院症例が集積し、成人期発達障害の確定診断や治療抵抗性気分障害の寛解導入治療（修正型電気けいれん療法を含む）の役割も担う。またアルコール・薬物依存症例は基幹病院・連携病院の両方で学ぶことができる。学術的には多岐にわたる臨床研究が進められており日本精神神経学会および日本臨床精神神経薬理学会の研修施設でもあることから、多様な精神科臨床の研修を可能とする。県内の医療機関と連携した専門研修プログラムのほか、岩手医科大学、杏林大学、魚沼基幹病院、国立精神・神経医療センターなど県外とも連携したプログラムも有する。</p>	
専門研修はどのようにおこなわれるのか	<p>1年目は基幹病院を中心に各種精神疾患を受け持ち、診断と治療計画、薬物療法及び精神療法の基本に加え、リエゾン精神医学を経験する。2・3年目は連携病院を中心に、治療者としての自立を目指し、面接技法や診断・治療能力の深化を図り、地域医療や精神科救急に従事して実践的対応を習得し、多職種チーム医療や心理社会療法の実践経験を積み、精神保健福祉法および地域資源や制度の活用についても習熟する。研修期間中は指導の下で、症例報告や臨床研究を学会・論文発表する。</p>	
専攻医の到達目標	<p>修得すべき知識・技能・態度など</p>	<p>診断や治療の知識に加え、患者関係、チーム医療、安全管理、医療の社会倫理を理解し、主導性・協調性・倫理性・説明力を伴った交流・管理能力を修得する。尚1年目からどの施設の研修でもアルコール・薬物依存症例を学ぶことができる。</p>
	<p>各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得</p>	<p>専門医に求められる知識の習得としての講義への参加に加え、症例検討会等で自ら発表・報告できることを基本とし、臨床疑問を持って関連文献の調査を行い、医師自ら主体的に学ぶ生涯教育の姿勢を心がける。</p>
	<p>学問的姿勢</p>	<p>基本的に症例から学ぶ姿勢を涵養し、症例報告や基礎・臨床研究などの成果を発表する経験を通して、リサーチマインドを持つ専門医の資質を身に付ける。</p>
	<p>医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性</p>	<p>医師の必須に求められるコアコンピテンシー（コミュニケーション能力、リーダーシップと協調性、マネジメント能力、論理性と説明能力、倫理観と社会性）の習得を目指す。</p>
施設群による研修プログラムと地域医療についての考え方	<p>年次毎の研修計画</p>	<p>1年目に基幹病院で全般的・基本的な知識を修得し、2年目に連携機関にて地域精神医療を経験し、3年目には特徴のある医療機関で地域医療の実践を行う。</p>
	<p>研修施設群と研修プログラム</p>	<p>基幹病院の琉球大学病院と沖縄県内の連携機関とで研修が完結するプログラムに加え、他大学（岩手医科大学・杏林大学）と連携する共同プログラムがある。</p>
	<p>地域医療について</p>	<p>沖縄県内の連携機関は、沖縄本島の南部・中部・北部と宮古島にまたがり、医師不足の北部圏及び離島圏域をカバーし、地域医療に貢献する研修となっている。</p>

<p>専門研修の評価</p>	<p>3か月ごとにプログラムの進行状況を専攻医と指導医が確認し、その後の研修方法を定める。研修目標の達成度は、当該研修施設の指導責任者と専攻医が6か月ごとに相互評価し、最終的な研修の評価に還元する。</p>	
<p>修了判定</p>	<p>3年間の研修プログラムの進行状況（学術発表を含む）や経験すべき症例の確認を行うとともに、専攻医及び指導責任者による研修目標の達成度の主観・客観評価を基に、プログラム統括責任者が終了判定を行う。</p>	
<p>専門研修管理委員会</p>	<p>専門研修プログラム管理委員会の業務</p>	<p>経験症例や学術発表など、各専攻医の研修プログラムの進行状況について、研修施設間で確認・共有を図りながら、年に2回の頻度で進捗度を点検・評価する。</p>
	<p>専攻医の就業環境</p>	<p>専攻医の心身の健康情報を共有しながら、各自の適性・能力・健康度に柔軟に対応した就業環境を提供すべく、年に2回の就業評価に関する情報交換を行う。</p>
	<p>専門研修プログラムの改善</p>	<p>年に2回、専攻医と統括責任者との間で、研修状況や就業環境に関する情報や要望を共有する研修委員会を持ち、プログラムの改善に向けた還元を得ている。</p>
	<p>専攻医の採用と修了</p>	<p>本研修プログラム枠は6名であり、採用にあたりマッチング面接を行っている。専攻医としての研修修了までの期間は、休止・中断がなければ原則3年である。</p>
	<p>研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件</p>	<p>産休などのため研修を休止する場合、その前後で同一研修施設での研修継続を原則としており、カリキュラム制への移行も可能である。他研修プログラムへの出入やプログラム外研修についても相談可能である。</p>
	<p>研修に対するサイトビジット（訪問調査）</p>	<p>本研修プログラムに対して日本専門医機構よりサイトビジットがあった場合は、専攻医および専門研修管理委員会が調査に協力し、評価を受けて改善を図る。</p>
<p>専門研修指導医 最大で10名までにしてください。 主な情報として医師名、所属、 役職を記述してください。</p>	<p>高江洲義和（琉球大学准教授）、福治康秀（琉球病院院長）、小渡敬（平和病院院長）、平良直人（天久台病院院長）、久場禎三（沖縄中央病院）、譜久原弘（南山病院院長）、山田豪人（宮古病院・科長）、大塚耕太郎（岩手医科大学病院・科長）、渡邊衡一郎（杏林大学病院・科長）、渡部雄一郎（魚沼基幹病院・精神科特任教授・精神科部長）</p>	
<p>Subspecialty領域との連続性</p>	<p>精神科領域における確立したsubspecialtyはまだないが、琉球大学病院は臨床精神神経薬理学会および認知症学会の研修施設となっている。</p>	